

特定外来生物

外来生物

重点対策外来種

コイ

学名 *Cyprinus carpio*
俗称 真鯉、錦鯉



中央アジア原産で、放流によって世界の温帯・亜熱帯域に広く分布しています。日本のコイは大昔に中国から移入されたと考えられ、縄文時代の貝塚からも化石が発見されています。しかし、関東平野や琵琶湖に野生のコイが分布することや、古い地層から化石も発見されていることから、日本にももともと自然分布していたが中国からの移入がありそれが広まったとされています。観賞用（錦鯉）や食用として養殖が盛んで、様々な伝説にも現れ、日本の文化と密接に関係している生き物です。

コイは都市河川などで、環境保護の一環として川をきれいにする目的で放流されたこともあります。しかし、コイの本来の生息域は大河川の下流域や大きな湖であるため、中小河川に放流されると他の魚の卵や稚魚を大量に捕食してしまうことがあります。また、ニシキゴイの放流が原因と推測されるコイヘルペスウイルスによる感染症が、地元のコイに蔓延し大量死する事象も発生しています。

雑食性で水生昆虫や水草など何でも食べ、水底が砂漠化する現象が問題となっています。そして大型に成長すると天敵がいなくなり、放流された水域で生態系の頂点に立つことになります。全世界に放流され、各地の生態系を圧迫していることから、国際自然保護連合ではコイを世界の侵略的外来種ワースト 100 に選定しています。

影響

日本には元々ノゴイ（野鯉）と呼ばれる在来種がいたとされていますが、放流されたコイと交雑し、在来種の遺伝子は消滅してしまいました。コイの口は下についていて、水底の泥を巻き上げながらたくさんの物を食べます。このことにより淡水生植物相・淡水無脊椎動物相へのダメージや堆積物の攪拌による水質劣化・富栄養化等が深刻になり、他の魚が生息できなくなるほど環境が悪化します。コイが棲めるほど川がきれいになったのではなく、コイしか棲めないような川や池になってしまったのです。

コイが侵入していない水辺は、水が澄んでいて、水底にはクロモやエビモなどが生い茂っているはずです。しかし、そのような川や池は三浦半島にはもうどこにも残っていません。



コイの口は下向きについている

三浦半島での分布傾向

一定規模以上の池や川ではどこでも見ることができます。コイの放流には問題があることがわかったので、最近では行政によるコイの放流は行われていません。しかし愛好家による密放流は続いており、新しくできた公園の池でも開園して1年以内にコイが放流されてしまうのが現状です。コイの愛好家は、人工繁殖させて品評会に出すような綺麗なコイをごくわずかだけ選抜して育て、そこに選ばれなかった大量の幼魚を各地の水辺に不法投棄しているようです。

初夏に浅瀬の植物やビニールゴミなどに産卵をします。複数の成魚が塊になって求愛行動し、メスは一度に数十万個の卵を産みます。



駆除の方法

警戒心が強いので、釣りや定置網で採集できるのはそこに生息しているごく一部の個体に留まります。目が良く瞬発力があるので、たも網で捕まえることも困難です。投網も破って逃げるほどのパワーがあります。このため小さいビオトープ池では、^{もり}銚で突くのが最も効率的です。大きな池の場合は、水を干し上げて駆除をする必要があります。

定置網での採集は



一部の個体しか掛からない。。。



小さい池で効果的！

銚で突く

大きい池の場合は ...



池の水を抜いて採集

似ている魚

フナ類

？
※
在来種

コイの幼魚とフナ類の幼魚がよく似ています。コイは口が下の方に向いており、口ひげがあることで見分けます。なお、フナ類の中でもゲンゴロウブナや金魚は人が持ち込んだ外来生物で、もともといたと思われるギンブナと交雑が進んでいます。もしかするとノゴイと同様に、在来系統を受け継いでいるフナはもう残っていないのかも知れません。※



フナ類幼魚

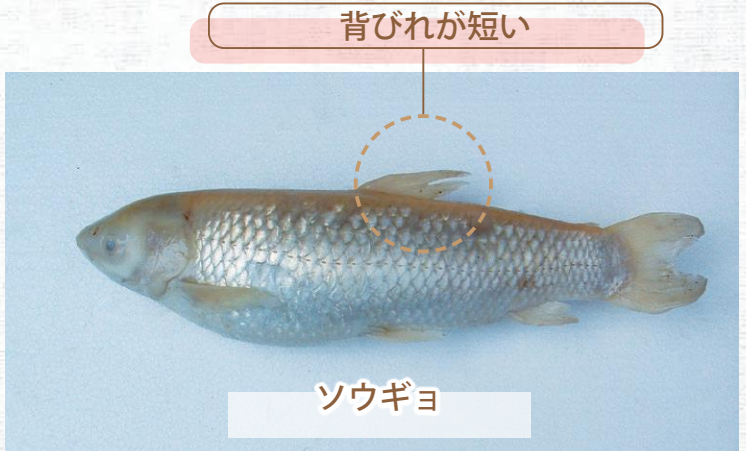


フナ類成魚

ソウギョ

外来種

平作川、下山川、田越川といった三浦半島の中では大きい川の下流域で見られます。一直線上の細長い体形をし、背びれが短いことで見分けます。黄色っぽいアルビノ個体も見られます。

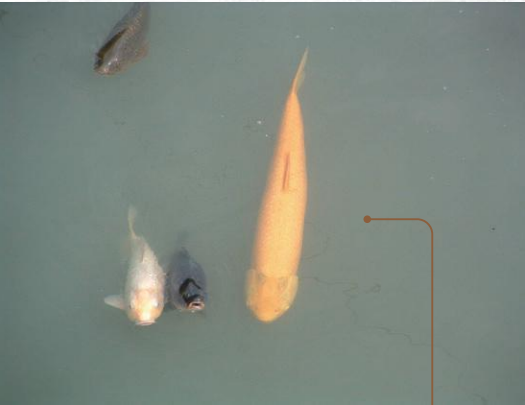


背びれが短い

ソウギョ



細長い体型が特徴



黄色っぽいアルビノ個体